

廣岡浅子激動の歴史ロマンとぶっちゃけ話

2016年1月27日午後3時～4時30分

at(株)ボネール本社会議室

講師：弊社法人理事 山田章一郎

● はじめに



山田章一郎講師

・通常は「七転八起」ですが、主人公の廣岡浅子は後年の執筆活動にはペンネームを「九転十起生」と名乗ったとおり、波瀾万丈の人生を過ごした。前もって配布された資料に沿って話があった。原案は古川智映子さん。昭和11年に出版された「大日本女性人名辞書」に記載されていた廣岡浅子に興味をもち、昭和63年に小説「土佐堀川」を上梓。NHKのプロデューサーの佐野元彦氏がAK（東京NHK）からBK（大阪NHK）に転勤になった折り、BK朝ドラのテーマを捜しに図書館を巡り歩き、発見したのがこの小説であった。

ドラマでは史実とは異なりフィクションの部分もあるが、このような人気を得るとは予想しなかった。

● 加島家の多角経営

- ・浅子（あさ）の実家、三井家は小石川三井家で、春（はつ）と共に正妻の子でなく、庶子の子として生まれた。慶応元年（1865年）17歳で両替商加島屋（廣岡家）に嫁ぐ。姉の春が嫁いだ天王寺屋五兵衛は北浜に店を構え、十人両替仲間の筆頭となった。向かいの平野屋五兵衛と共に「天五平五の十兵衛横町」と呼ばれ、市立開平小学校脇に記念碑が残っている。
- ・大阪の両替商は京都のそれと比べて幕府に肩入れし、大量の金を貸していた。新政府樹立後は、それらが不良政権になったばかりか、新政府からも御用金の徴収もあり、天王寺屋を始め多くが倒産してしまった。浅子はもともと商売・学問好きで、嫁いでからは小藤（むめ）と伴って昼は情報収集に街中に繰り出し、夜は店の台帳を基に簿記、算術を独学で修得し、加島屋の立て直しに奔走した。
- ・明治に入ってから多角経営に乗り出し、明治17年（1884年）石炭の輸出販売を手がけるも、積出し港が長崎港と遠く業績不振失敗、販売から採掘の炭鉱業に転換し、紆余曲折を経て「潤野炭鉱」を買収し、自ら炭鉱にてピストルを懐に陣頭指揮を執り、優良炭鉱となった。この炭鉱は後に官営八幡製鉄所の石炭供給源として国に売却された。

ちなみに、レトロで有名な門司港に残る旧税関は、石炭の積出し港を長崎港から近くの門司港とするために、浅子達が税関設置に尽力を、その後門司港は我が国最大の石炭積み出し港へと発展した。

- ・明治 21 年（1888 年）渋沢栄一の指導のもとに加島銀行を設立。銀行は信用と人材育成が重要との信条で、業務終了後の夜は行員研修の教場に立った。女史行員の採用も行った。
- ・明治 22 年（1889 年）尼崎に地元商人や士族と共に有限会社尼崎紡績を設立。初代社長は廣岡信五郎。その後日露戦争後に発展、大正 7 年摂津紡績を合併して大日本紡績と改称。その後日本レイヨンと合併してユニチカとして現在に至る。
- ・明治 32 年（1899 年）には加島家が西本願寺門戸代表格との関係から、経営不振にあえぐ「真宗生命」の支援を要請され、朝日生命として改革する。明治 35 年には北海生命、護国生命と合併、大同生命を発足し現在に至る。命名は「小異を捨てて大同につく」。
- ・明治 29 年（1896 年）梅花女学校長であった成瀬仁蔵から「女子教育」を手渡され、感銘を受け、設立基金の寄付をはじめ財界の重鎮にも賛同を求め、三井家から東京目白台の土地 5,500 坪の寄付を受け、明治 34 年（1901 年）日本女子大学校を開校。大隈重信創立委員長を始め、伊藤博文、西園寺公望、渋沢栄一などが支援した。

● 廣岡浅子の私生活

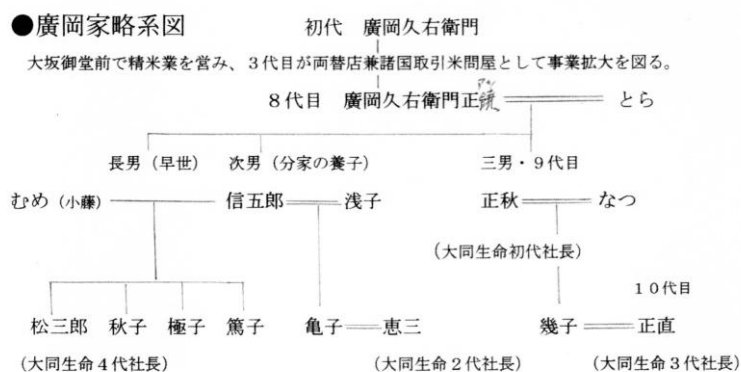
・正妻の長男（小石川三井七代目）とは 20 歳も離れており、後の八代目となる高景とは兄弟の様に過ごした。姉の春は 29 歳にて他界した。

・加島屋立て直しに奔走した浅子は、家を空

けている間、信五郎は小藤（むめ）と男

女関係になったが、跡取りが増えたとの認識で気に掛けなかったと伝えられている。結局小藤との間に一男三女が生まれ、男子は後に大同生命の四代目社長に就任している。

- ・明治 37 年（1904 年）信五郎に先立たれた浅子は娘婿の恵三に譲り、実業家から引退する。女子教育などの社会活動や婦人事業、ペンネームを「九転十起生」として執筆活動や自身の学問に専念する。明治 42 年（1909 年）に胸部の悪性腫瘍手術を受け回復。翌年、62 歳にて大阪教会で洗礼を受ける。以後婦人運動や YMCA、YWCA



といったキリスト教の宣教活動、別荘地の御殿場にての若い女性を集めた合宿勉強会を開き、若き日の市川房枝、村岡花子らも参画した。

- ・大正8年（1919年）腎臓炎のために東京の別邸にて70歳にて逝去。

● おわりに

- ・与謝野晶子、吉本せい、住友登久、奥田ふみ等と共に大阪の御陵人気質として後世に語り伝えられている。資料収集はもとより、小説「土佐堀川」も読みましたが、商人から実業家、社会活動家と、まあ大変な女傑だった。女性活躍社会を向かえらとする今日、大阪に多くの女傑が出現して活性化を図って欲しいものである。



(文責：伊藤忠)